



インターネットの普及に伴い、書籍の電子化が進んできた。国立国会図書館は、国内の学会誌の電子ジャーナル化の状況に関するアンケート調査を2024年に実施した。それによると和文誌については、一部またはすべてのタイトルを電子化が約6.5割、電子化していないと回答した機関でも約3割は「予定・検討中である」と回答している¹⁾。

著者も文庫本を買っているうちに、書棚では収まりきらず、散らかった部屋で再度読みたくなった本を探したり、処分するために古本屋に足を運ぶことが増えた。また分厚い本を持ち歩くのに苦勞するなどの不便さを解決してくれる電子書籍の登場は、読者にとっては救世主である。パーソナルコンピュータから、携帯に便利なタブレット端末が登場し、その動きは加速した。一方、2020年の1月から新型コロナウイルスが猛威をふるい、ソーシャルディスタンスを保つために授業や会議が対面からリモートに変わった。

購入、収納、携帯、検索の利便性は紙媒体よりも優れ、電子書籍の利用者は増加し、普及率は20～30歳代が最も高い。50歳代以降の利用率は減少するも、多くの人が恩恵に預かっていることは間違いない。小学生の約55%が家庭学習においてデジタル教材を利用しているという報告²⁾からもわかるように、教育場面で学生一人にタブレット端末1台があたり前となり、教科書も急速に電子化した。紙の書籍の利用者数の減少から、図書館の閉館が増え、その打開策として電子化書籍を導入する動きもある。保管場所がいらず現物管理の手間が省け、業務効率が向上するメリットがある。しかし、依然として紙媒体での書籍の割合が意外に多く、閲覧できる数が限定的であり、またインターネット環境が整っていない人、特に高齢者にとっては決して便利なものではない。

冒頭の国立国会図書館の調査でも、すべての内容をデジタル化していると回答したのは約4.5割にとどまり、デジタル化を阻害する要因の約6.5割が予算、人員、約3.5割が著作権関係の処理が挙げられている。

電子書籍はピンポイントに検索できるメリットがある

が、知りたい情報とは直接関係のない内容に触れる機会が減り、知らぬ間に情報源が偏ってしまう可能性がある。図書館や書店で希望の本を探している過程で、本来自分が探していたものではないことが記載された本に偶然出会い、ひらめきや新たな発見につながる経験が奪われていると感じる。

電子書籍では、文章の深読みができない子どもたちが増えたともいわれ、その理由の1つとして、マクルーハンの学説では「反射光」と「透過光」の性質の違いから説明している。文字認識の仕方が異なり、紙媒体では光が紙に反射する反射光を目がとらえているため、脳は「分析モード」に切り替わる。一方、電子媒体では直接目に入る透過光であるため、画像の情報をそのまま受けとめ、細部よりも全体を把握する「パターン認知モード」となり、誤字などを認識しづらくなるといわれている。

学校教育のデジタル化で先進的なヨーロッパでは、2023年8月、スウェーデンの学校教育大臣が紙の書籍への回帰を進め、6歳未満の子どものデジタル学習を完全に廃止する計画が報道された。2016～2021年の児童の読解力が低下したことがその理由である。

本誌の読者層に直接あてはめることはできないが、紙媒体と電子媒体の活字が、われわれに与える影響に違いがあることは確かであろう。

現在、本誌でも紙媒体に加え電子化を行っているが、電子化と紙媒体のどちらか1つを選択するのではなく、両者の良さを認め、読者の皆様に状況に合わせてご利用いただけるように願っている。

1) 国立国会図書館：令和6年度学術情報の収集・保存に係る学協会アンケート。2025 (<https://current.ndl.go.jp/e2785>) (参照 2025-06-03)

2) 新興出版社啓林館：小学生の約55%が、家庭学習においてデジタル教材を使用している！ (<https://prtmes.jp/main/html/rd/p/000000287.000032562.html>) (参照 2025-06-03)

忽滑谷和孝